様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 ２７ 日現在

機関番号：３４４５３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2021
課題番号：１８Ｋ０２１３５

研究課題名（和文）地域における軽度認知障害および軽度認知症者の家族に対する心理教育支援

研究課題名（英文）Psychoeducational program for families of persons with mild cognitive impairment and mild dementia in the community

研究代表者
菅沼　一平（Suganuma, Ippei）

大和大学・保健医療学部・教授

研究者番号：８０７６２２２８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は地域における軽度認知障害および軽度認知症者の家族介護者に対する心理教育の効果を検討することである．主要アウトカムとなるエンパワーメントの尺度開発を行い，その後，心理教育介入を実施した．結果，介入前後においてエンパワーメントを構成する因子である自己効力感や介護肯定感の有意な向上を認めた．

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の学術的意義は，地域で在宅介護を実施している家族介護者に対して，比較的介護の初期の段階で介入をし，家族介護者の介護力（エンパワーメント）を高める点にある．また，社会的意義は，家族介護者の介護力（エンパワーメント）を高めることで安定した在宅介護生活の継続を目指している点にある．介護力を高めることは適切な在宅介護を行うということも内包しており，被介護者である認知症の人の症状安定にも寄与すると考える．

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to examine the effects of psychoeducation on family caregivers of persons with mild cognitive impairment and mild dementia in the community. An empowerment scale was developed as the primary outcome and a psychoeducational intervention was used. The results showed that self-efficacy and positive feelings toward caregiving, which are components of empowerment, were significantly improved before and after the intervention.

研究分野：社会福祉学

キーワード：心理教育　家族介護者　認知症　軽度認知障害　エンパワーメント　地域支援

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究の目的

本研究の目的は，上記の社会的背景を鑑み，在宅居住の MCI，軽度認知症者の家族介護者に対して心理教育プログラムにて支援を行い，その効果を検証するものである．具体的には，在宅居住の MCI，軽度認知症者の家族介護者に対して，① 認知症疾患の特性やこれから起こりうる症状（予後）へ理解を深める，② 介護に対する内発的な力をつける，③BPSD の対 処技術向上の向上，④問題解決能力強化，⑤家族の対応力向上よる BPSD の軽減および認知症の進行予防，を図ることで，介護力（エンパワーメント）を高め，長期の在宅生活継続を目標としている．

２．研究の方法

効果指標の開発から心理教育プログラム介入による効果検証まで 3 段階に分けて研究を実施する．研究Ⅰ：エンパワーメント評価尺度を開発する．研究Ⅱ：エンパワーメントの背景要因や介護継続意思との関連について検証する．研究Ⅲ：心理教育プログラムの介入効果について検証する．

【研究Ⅰ】

１）目的

本研究の目的は，認知症の人の家族介護者（主たる介護者）のエンパワーメントを測定するための評価尺度（Empowerment Assessment Scale for Principal Family Caregivers of Persons with Dementia：EASFCD）を開発し，その尺度の妥当性および信頼性を検証することである．

２）方法

調査対象者は，家族介護者（主たる介護者）190 名である．調査票については，調査協力に同意した家族介護者に配布した結果，117 部を回収（回収率 61.6%）した．尺度の基本的な構成概念の確定のために探索的因子分析を行い，併存的妥当性の検証のために，基準となる標準尺度を用いて相関分析を行った．また，尺度の信頼性の検証を行うために，Cronbach α 信頼性係数を用いた信頼性分析を行った．

【研究Ⅱ】

１）研究目的

本研究の目的は，エンパワーメントと介護継続意思の関連について検証することである．

２）方法

家族介護者のエンパワーメント評価尺度（Empowerment Assessment Scale for Principal Family Caregivers of Persons with Dementia：以下，EASFCD） を従属変数として，介護者・被介護者の年齢，性別，続柄，健康関連 QOL，うつ，認知症の行動・心理症状の重症度を独立変数とした．質問紙を家族介護者 190 名に配布，郵送し，分析対象者は 95 名となった．

【研究Ⅲ】

１）研究目的

本研究の目的は心理教育を，在宅で認知症の人を介護している家族介護者に実施し，効果を検証することである．

２）方法

家族主介護者 24 名に心理教育を実施した．心理教育プログラムは 1 セッションにつき座学 30 分，グループワーク 90 分の合計 120 分行い，合計 4 セッション行うこととした．頻度は，4 週間に 1 回 1

セッション行うこととし，16 週間で 4 セッションの介入すべてが終了する．

３．研究の成果

【研究Ⅰ】

45 項目の EASFCD 試作版は，因子分析の結果，6 因子 33 項目となった．その因子は，因子 1〔介護への否定的感情〕，因子 2〔介護の知識・技術に関する自己効力感〕，因子 3〔介護に対する意識・結果・期待〕，因子 4〔介護への肯定的感情〕，因子 5〔被介護者との関係性〕，因子 6〔相談相手の有無と情動的サポート〕であり，累積寄与率は 57.1%であった．また，基準となる尺度との相関については，中程度（0.3～0.4 程度）の負の有意な相関が見られた．そして，因子ごとの Cronbach α 信頼性係数は，おおむね 0.7 以上であった．これらのことから，尺度の構成概念について，基本的な構成概念は検証されたと考える．そして，尺度の基準関連妥当性については，基準となる尺度との関連性が見られたため，基準関連妥当性があると判断でき，因子ごとの Cronbach α 信頼性係数も，ある程度の高い数値を示しているため，尺度の内的一貫性（信頼性）があると判断できる（表 1）．

【研究Ⅱ】

在宅介護継続意志がある群(在宅介護継続意志群)が 65 名，在宅介護継続意志が困難な群(非在宅介護継続意志群)が 30 名であった．ロジスティック回帰分析の結果，介護者の年齢（OR：1.07，95%CI：1.021－1.122）と EASFCD の因子の一つである介護への肯定的感情（OR：1.312，95%CI：1.072－1.674）が在宅介護継続意志に影響を及ぼしていることが示された．介護者が介護問題に対処しながら，経験知を積み重ね，年齢的成熟とともに介護を肯定的に捉え，その過程で介護継続意志が決定されていくものと考えられる．以上より，在宅居住の MCI および軽度認知症者の家族に対して心理教育介入を実施し，その効果を検証することは，安定した長期の在宅生活継続を目指すうえでも極めて重要であると考える．

【研究Ⅲ】

介入前後の比較にて EASFCD の各因子では，【因子 2：介護の知識・技術に関する自己効力感】と【因子 4：介護への肯定的感情】の得点が有意に向上し，EASFCD 総得点においても有意な向上を示した．心理教育介入は，課題を残しつつも，家族主介護者のエンパワーメント状態への兆しを見せ，一定の効果は示したと考える（表 2，表 3）．

表1　Empowerment Assessment Scale for Principal Family Caregivers of Persons with Dementia(EASFCD)

下位尺度と項目		採点法（4件法　132点満点）
【第1因子】　介護への否定的感情　　32点満点		
1	被介護者様のそばにいると気が休まらないと思うことがある	4. とてもそう思う　3. まあまあそう思う　2. あまりそう思わない　1. 全くそう思わない
2	被介護者様のそばにいると腹が立つことがある	
3	介護を誰かに任せたいと思うことがある	
4	被介護者様の行動に対して困ってしまうと思うことがある	
5	被介護者様に上手く関わることができず落ち込むことがある	
6	この先ずっと介護をすることに対して不安を感じる	
7	介護に時間をとられ，趣味や社会活動ができずストレスに感じる	
8	介護の問題で他の家族と意見がぶつかることがある	
【第2因子】　介護の知識・技術に関する自己効力感　20点満点		
1	自分の介護に足りないと思う知識や技術に関する情報を集めることができる	4. とてもそう思う　3. まあまあそう思う　2. あまりそう思わない　1. 全くそう思わない
2	自分は認知症者に必要な社会資源（介護サービスなど）の知識を有している	
3	自分は認知症という疾患に関する知識をもっている	
4	自分は声かけや介護によって被介護者様の良い反応を引き出すことができる	
5	自分は被介護者様の訴えや行動に臨機応変に対応できる	
【第3因子】　介護に対する意識・結果・期待　28点満点		
1	自分が介護をすることによって，訴えや行動面を少しでも良い方向に向かわせたい	4. とてもそう思う　3. まあまあそう思う　2. あまりそう思わない　1. 全くそう思わない
2	自分が介護することで，被介護者様の良い反応（表情など）を引き出したい	
3	自分が介護することにより，生活が安定すればよいと思う（例えば，自分が介護をすることで他の家族も仕事，学業各々のするべきことに専念でき，日々の生活を問題なく過ごすことができるということ）	
4	介護や声かけによって良い反応（例えば，被介護者様の不安が鎮まったり，精神的に落ち着くなど）が得られることが重要だと思う	
5	被介護者様が些細なことで喜ぶのを見るとうれしくなることがある	
6	自分が被介護者様を介護するのは当然のことだと思う	
7	被介護者様が新たな役割が持てるよう働きかけることが重要である	
【第4因子】　介護への肯定的感情　20点満点		
1	被介護者様の介護をすることで，満足感が得られることがある	4. とてもそう思う　3. まあまあそう思う　2. あまりそう思わない　1. 全くそう思わない
2	被介護者様を介護することで，自分が元気づけられたり励まされたりすることがある	
3	介護が楽しいと感じることがある	
4	被介護者様の介護をするのが自分の生きがいになっている	
5	介護を義務感ではなく，望んでしている	
【第5因子】　被介護者との関係性　16点満点		
1	被介護者様との現在の人間関係は良好である	4. とてもそう思う　3. まあまあそう思う　2. あまりそう思わない　1. 全くそう思わない
2	被介護者様との病前の人間関係は良好であった	
3	被介護者様は私に感謝しているように思う	
4	被介護者様への影響（言葉かけの内容やタイミングによっては，被介護者様の不安が強くなる，あるいは落ち着くなど）を考えながら介護している	
【第6因子】　相談相手の有無と情動的サポート　16点満点		
1	相談できる親戚がいる	4. 常にいる　3. しばしばいる　2. あまりいない　1. 全くいない
2	相談できる家族がいる	
3	相談できる友人・知人がいる	
4	家族・親戚は自分の気持ちをよく理解してくれている	

表2 家族主介護者の基本情報と介護状況

n=24

属性・介護状況	平均値±標準偏差 中央値（25%，75%）	内訳	
家族主介護者年齢（最小値47，最大値90）	64.9±12.1	-	
家族主介護者性別		男性	6(25.0%)
		女性	18(75.0%)
被介護者年齢（最小値74，最大値98）	82.1±6.4	-	
被介護者性別		男性	8(33.3%)
		女性	16(66.7%)
認知症病型		AD	16(66.7%)
		VaD	4(16.7%)
		DLB	2(8.3%)
		その他	2(8.3%)
被介護者から見た家族主介護者の続柄	-	子供	13(54.2%)
		配偶者	9(37.5%)
		嫁	2(8.3%)
同居人数(最小値1，最大値5　※家族主介護者含む）	2.7±0.9	単身	2(8.3%)
		2人	8(33.3%)
		3人	11(45.8%)
		4人	1(4.1%)
		5人	2(8.3%)
利用サービス数/ 週 (最小値0，最大値4)	1.3±0.9	-	
認知症の診断を受けてからの期間(月)（最小値0.5，最大値96）	28.4±32.1	-	
介護期間(月)（最小値1，最大値240）	38.6±33.4	-	
DBD13(最小値9，最大値39)	22.8±8.7	-	
EASFCD総得点（最小値71，最大値101）	85.1±9.7	-	

家族主介護者年齢，被介護者年齢，同居人数（主介護者含む）サービス利用数/週，認知症の診断がついてからの期間(月)，介護期間，DBD13，EASFCD総得点は平均±標準偏差で表記

家族主介護者性別，被介護者性別，被介護者から見た介護者の続柄については内訳とパーセンテージで表記

※DBD13 … Dementia Behavior Disturbance Scale,
EASFCD…Empowerment Assessment Scale for Principal Family Caregivers of Persons with Dementia

表3　結果（EASFCDとDBD13の推移）

アウトカム	1次調査	2次調査	3次調査	p値 ベースライン期 1次調査-2次調査	介入期 2次調査-3次調査	全期間 1次調査-3次調査
EASFCD総得点（132点満点）	85.1±9.7	85.4±8.9	87.5±8.6	n.s.	0.000	0.007
【第1因子】　介護への否定的感情（32点満点）	16.4±3.8	16.0±3.8	15.8±4.1	n.s.	n.s.	n.s.
【第2因子】　介護の知識・技術に関する自己効力感（20点満点）	12.7±3.1	12.5±3.1	13.4±2.2	n.s.	0.039	n.s.
【第3因子】　介護に対する意識・結果・期待（28点満点）	22.3±3.2	22.2±3.1	22.3±3.0	n.s.	n.s.	n.s.
【第4因子】　介護への肯定的感情（20点満点）	10.5±3.2	10.7±2.4	11.8±1.8	n.s.	0.002	0.009
【第5因子】　被介護者との関係性(16点満点）	11.8±1.4	12.1±1.3	11.9±1.5	n.s.	n.s.	n.s.
【第6因子】　相談相手の有無と情動的サポート （16点満点）	11.2±2.6	11.4±2.4	11.2±2.4	n.s.	n.s.	n.s.
DBD13	22.8±8.7	22.0±7.5	22.2±7.3	n.s.	n.s.	n.s.

EASFCD総得点，DBD-13 は平均±標準偏差で表記　　*p<0.05　**p<0.01

※DBD13 … Dementia Behavior Disturbance Scale,
EASFCD…Empowerment Assessment Scale for Principal Family Caregivers of Persons with Dementia

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　4件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 菅沼一平，瀬川 大，上城憲司，岡田 進一	４．巻 55
２．論文標題 認知症の人を介護する家族主介護者のエンパワーする支援の検討 -心理教育介入の予備的研究-	５．発行年 2021年
３．雑誌名 作業療法ジャーナル	６．最初と最後の頁 1529-1535
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11477/mf.5001202818	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 菅沼一平,中西亜紀,南 征吾,岡田進一	４．巻 67
２．論文標題 認知症の人の家族介護者（主たる介護者）に対するエンパワーメント評価尺度の開発	５．発行年 2020年
３．雑誌名 厚生の指標	６．最初と最後の頁 38-47
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11501/2684735	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 菅沼一平,中西亜紀,上城憲司,岡田進一	４．巻 7
２．論文標題 認知症の人を介護する家族のエンパワーメントに影響を及ぼす要因	５．発行年 2020年
３．雑誌名 日本臨床作業療法研究	６．最初と最後の頁 16-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 菅沼一平,中西亜紀,上城憲司,岡田進一	４．巻 6
２．論文標題 認知症の人を介護する家族の介護継続意志とエンパワーメントの関連	５．発行年 2020年
３．雑誌名 日本臨床作業療法研究	６．最初と最後の頁 60-67
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	上城　憲司 (Kamijou Kenji) (90454941)	西九州大学・公私立大学の部局等・教授 (37201)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関